

美作地域最古級の横穴式石室を調査

くわやま
桑山古墳群

たかお
津山市高尾

一般国道53号（津山南道路）改築に伴い発掘調査を行っている桑山古墳群は、^{さらがわ}皿川が形成した平野部を東に見下ろす尾根の先端頂部に所在します。この古墳群は4基の古墳からなり、現在までに2号墳と4号墳の様相が明らかとなりました。

2号墳は、直径約15m、高さ約3mの円墳で、南西に開口する^{りょうそで}両袖式の横穴式石室を持っています。後世に石材を抜き取られて天井や壁の大部分が失われており、^{きていせき}基底石付近しか残存していませんでした。遺体を安置する^{げんしつ}玄室はほぼ方形の平面形で、その規模は長さ約240cm、幅約185cmを測ります。^{せきしよくがんりよう}赤色顔料が塗られた側壁は、^{こぐち}小口面を内側に向けた石材を、徐々に内側へせり出すように積み上げ



2号墳遺物出土状況（北西から）

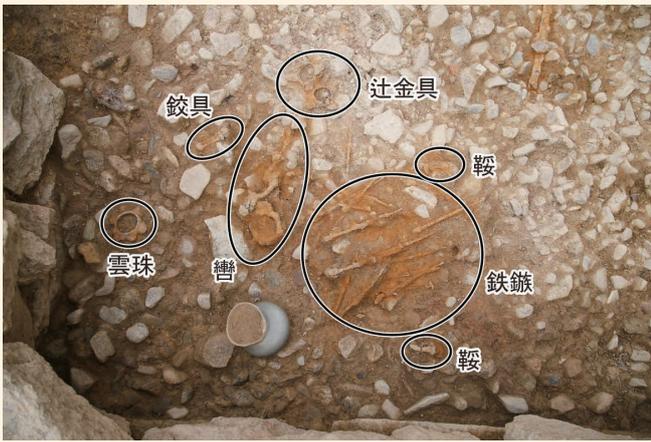


写真1 2号墳遺物出土状況（南西から）



写真2 2号墳遺体安置状況〈推定〉（北西から）

で築いていたようです。川原石や砂を10cm程敷いた玄室の床面には、須恵器（杯身、杯蓋、壺）、武器（素環頭大刀、鉄鍬）、馬具（轡、雲珠、辻金具、鉸具、鞍、鞍に使用された飾り鉸）、耳環などが副葬されていました（巻頭写真・写真1）。大刀や耳環の出土位置から、玄室北西辺に並んで出土した須恵器の杯身・杯蓋のうち、中央に伏せて置かれた一対は遺体の頭部を載せる枕と思われ、写真2のように玄室長軸に対して直交するように遺体が安置されていたと想定されます。通路である羨道は、長さ約140cm、幅約60cmと非常に短く幅が狭い造りで、その床面には50cm大の扁平な石が敷かれていました。この横穴式石室は、その形状が美作市穴が辻古墳などと似た形であり、さらに出土した須恵器も6世紀中頃の特徴を持っていることから、美作地域最古級の横穴式石室と言えます。

直径約10m、高さ約2mの4号墳は、墳丘中央部に2基の竪穴式石室が築かれた円墳です。6世紀中頃に造られた東側の石室（第1主体部）は、長軸約205cm、幅約80cmの大きさで、棺台と見られる扁平な石が床面に置かれていることから、木棺が埋葬されていたと想定されます。副葬品には、須恵器（杯、壺）、土師器（甕）、鉄器（刀子）、玉類（水晶製の算盤玉、碧玉製の管玉、ガラス製の小玉）がありました（写真3）。長軸約195cm、幅約50cmを測る西側の石室（第2主体部）は、北側小口に須恵器の杯身・杯蓋が5組、南側小口に須恵器の壺が1個、東側壁際に鉄刀や鉄鍬などの武器が副葬されていました（写真4）。時期は、第1主体部よりやや新しい6世紀後半頃と想定しています。近接して築かれた両石室ですが、その大きさや埋葬方法（木棺が使用されているものとされていないもの）、さらに副葬品の内容（装身具を持っているものと武器を持っているもの）が異なっており、どのような理由でその差異が生じたのか、今後明らかにしていきたいと思えます。

（小嶋善邦）



写真3 4号墳第1主体部遺物出土状況（南西から）



写真4 4号墳第2主体部遺物出土状況（南から）

南山城跡は、高梁川と小田川の合流点を見下ろす丘陵上に築かれた戦国時代の山城跡で、平成29年度から発掘調査を行っています。今年度は、城の中核である頂部の曲輪（城兵が駐屯する平坦地）、その南側に隣接する腰曲輪、南斜面の畝状豎堀群を調査しています。

頂部の曲輪は、高さ約3mの大規模な土塁によって東西に二分され、礎石立ちの門を伴う通路によってつながっています。東側の曲輪では2棟、西側では1棟の掘立柱建物が見つかりました。また、曲輪内のあちこちで投石用に寄せ集められた石（集石）が確認され、戦闘への備えが見て取れます。曲輪の西辺にも土塁が築かれ、その中央部は西側に突出した「櫓台」となり、1×1間の掘立柱建物を設置して、背後の尾根筋に対する守りを担っています。

腰曲輪は、頂部の曲輪から少し南に下った位置に設けられた長方形の平坦地です。曲輪内では掘立柱建物が検出されたほか、石製の硯、切羽（刀剣の鏢の部品）、小柄（刀剣に付属する小刀）、小皿に載った銅銭などの特徴的な遺物が出土しました。

南斜面の畝状豎堀群は21条の豎堀からなり、両端の堀切も含めて合計23条もの堀が櫛の歯のようにびっしり並んだ様子は迫力満点です。南山城周辺の地形は、南側が最も緩やかで防御上の弱点になることから、畝状豎堀群によって攻め手の移動を妨げようとしたと考えられます。敵の侵入を絶対に許さないという、築城者の強固な意志が伝わってきます。

南山城跡は、小規模ながら各種の厳重な防御施設を有することから、古くから注目されていました。今回の調査を通じて、改めてその堅固な城の守りが明らかになり、築城当時の緊張感が想像できました。今後はさらに、城の構造や出土遺物の検討を通じて、南山城の築かれた歴史的背景や城の変遷を明らかにしていきたいと思えます。（岡本泰典）



頂部の曲輪（北から）



頂部の曲輪（奥）と腰曲輪（手前）（南東から）



腰曲輪から出土した硯



南斜面の畝状豎堀群（南西から）

総社第2調整池の増設に伴い、平成31年4月から令和元年6月の3か月にわたって一丁埴38号埴の発掘調査を行いました。一丁埴古埴群は4世紀から5世紀にかけて築かれた古埴群で、全長約70mの前方後方埴である1号埴（4世紀前半）は岡山県指定史跡となっています。

38号埴は古埴群中で最も南に位置する古埴です。発見された時にはすでに埴丘が大きく削られていましたが、調査の結果、一辺約15mと推定される方埴であることが分かりました。埋葬主体は削平されてなくなったと思われます。また周溝が検出されたほか、埴丘の断面の観察から、地山を削り出した上で盛土を施すことによって埴丘を築造していることが判明しました。

埴丘上では円筒埴輪が据えられた状態を保ったまま出土したほか、埴丘の裾部では埴輪・須恵器片が散らばって見つかりました。これらは本来埴丘上に立て並べられていたものが転落したものでしょう。埴輪・須恵器の特徴から、一丁埴38号埴は5世紀中葉頃に築造されたものと考えられます。（四田寛人）



一丁埴 38 号埴全景（東から）



埴丘上で出土した円筒埴輪（南から）

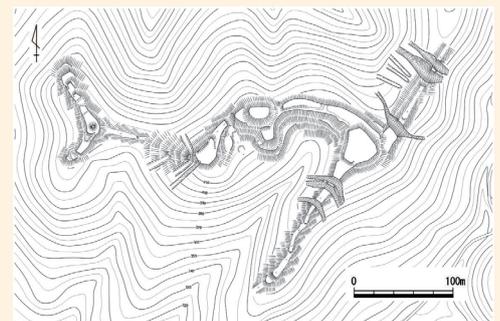
中世城館跡総合調査

最終の7年目となる今年度は、調査成果をまとめた報告書の作成を行っています。備前・備中・美作国の3分冊として、城館の位置図や構造を表した縄張り図とその解説、関連する文献史料等を掲載します。

さて、昨年までの6年間に現地調査を行った県下の城館跡数は、所在地の分かるもののほぼすべてに当たる約1,370か所に上ります。それらのうち、曲輪や堀切などの城館関連遺構を確認したのは約1,160か所で、その中の約690か所について新たに縄張り図を作成しました。これらの縄張り図は、GNSS（汎地球測位航法衛星システム：人工衛星を用いた測位システムの総称）受信機で計測した位置座標から作成した高精度の図面です。同じ精度と基準で作成した縄張り図が相当数そろったことで、城館跡相互の比較検討が可能になりました。また、城館跡の正確な位置を示すことは、開発から城跡を守り、後世に伝えることにつながります。今回の調査成果は、本県のみならず全国の城館跡の保存・活用に役立つ基礎資料として期待されます。（氏平昭則）



高梁市備中松山城跡 調査中



縄張り図例 真庭市月田城跡

県内の発掘調査報告会「大地からの便り2019」

6月22日（土曜日）、発掘調査成果について映像を交えながら紹介する報告会を岡山県立博物館の講堂において開催しました。今回は、近年の調査のなかでも新聞等で報道されるなど、特に耳目を集めた5遺跡（佐山東山窯跡、桑山南・細畝古墳群、南山城跡、神明遺跡）について取りあげました。その報告は窯・古墳・山城・銅鐸といった、多彩な内容となりました。参加された102名もの皆さんは、熱心に耳を傾けていました。

佐山東山窯跡（備前市）は、平成24～29年にかけて岡山理科大学考古学研究室が調査した国内最大規模を誇る奈良時代の須恵器窯で、亀田修一先生にご報告いただきました。出土した文字資料の詳細な検討から、奈良時代の邑久郡北部の郡域・郡名の変遷もうかがえるという興味深い内容で、身近な地名について改めて考えさせられる、とても良い機会となりました。

桑山南・細畝古墳群（津山市）は、平成29～30年度にかけて調査を行った、6世紀後半～7世紀前半の古墳群です。調査途中の映像は実際に現地を見学しているような臨場感溢れるものでした。現在は、隣接する桑山古墳群を調査中で、古墳の大きさや埋葬施設、副葬品の違いが表す意味について、今後の報告が楽しみとの感想が届いています。

南山城跡（倉敷市）は、現在も調査を継続中の戦国時代の山城で、昨今の城ブームを受け、現地説明会でも多くの方が訪れた注目度の高い遺跡です。報告会初の試みとして行われた、ドローンを用いて撮影した動画による解説は、山城の構造や立地がよくわかると、好評を博しました。

神明遺跡（総社市）は、平成26年、発掘調査中に銅鐸が出土して脚光を浴びた遺跡です。昨年度末に刊行した報告書では、銅鐸の時期や出土状況などについて、詳細な記載があります。銅鐸にポイントを絞った今回の報告は、神明銅鐸のみならず県下出土の銅鐸の受容のあり方や埋納された意味にも及んだことから、多くの質問がありました。

またこの報告会に関連し、岡山県古代吉備文化財センターが近年発掘調査を行った遺跡について紹介する展示「最近の発掘調査から」を開催中です。報告会で紹介した「桑山南・細畝古墳群」、「南山城跡」の他、平成29年度に調査を行った赤磐市の「朱千駄古墳」の出土品も展示しています。場所はセンター1階展示室、期間は10月7日（月曜日）までとなっています。（團 奈歩）



報告会の様子



展示の様子（細畝古墳群）



展示の様子（南山城跡）

展示室から

平成31年4月16日（火曜日）から令和元年10月7日（月曜日）まで、企画展1として「銅鐸が見つかったムラ」と題した展示を行っています。これは、平成25～28年度に国道180号バイパスの建設に伴って発掘調査を実施した総社市刑部遺跡・神明遺跡の代表的な出土品を集めたもので、このたび調査成果をまとめた報告書の刊行を機に企画しました。吊り手に流水文を飾った珍しい袈裟襷文銅鐸はもとより、古墳時代の銅鏡片や渡来系の技術を伝える曲刃の鉄鎌、緑彩緑釉陶器という平安時代の高級食器など、注目すべき遺物が数多くあり、総社平野のたどった歴史がうかがえます。



「銅鐸が見つかったムラ」の展示

また、平成31年4月26日（金曜日）から令和元年6月16日（日曜日）まで、「令和」への改元を記念して、「元号が始まった時代」と題した展示を行いました。始めて元号が定められた飛鳥時代（7世紀）は、国家としての体裁が整えられるとともに、我が国最初の仏教文化が花開いた時代です。この展示では、この地の役人たちが用いた焼き物の硯（中空円面硯）や寺院の軒先を飾った吉備最古の屋根瓦（蓮華文軒丸瓦）、金属製の食器を模倣した焼き物（須恵器）、厄払いに使われた馬形の焼き物（土馬）などを出品しました。（團 奈歩）



「元号が始まった時代」の展示品

小学生津島見学

4月から6月にかけて、岡山市・玉野市・吉備中央町の合計16小学校の主に6年生1,236名が、津島遺跡の見学に訪れました。津島やよい広場では、復元した竪穴住居や掘立柱建物、水田を間近に見学しました。「津島遺跡ボランティア」の皆さんやセンター職員の説明を真剣に聞き、メモを取る小学生の姿が見られました。さらに、遺跡&スポーツミュージアムでは、ミュージアムスタッフの説明で、津島遺跡からの出土品について学びました。また、全体のほぼ半数に当たる692名（9校）の小学生が、勾玉作りや火起こしなどの古代体験や、本物の弥生土器に触れる体験に参加しました。見学に訪れた小学生は、津島遺跡での歴史学習や体験学習を通じて、社会科で習い始めたばかりの弥生時代や古墳時代を身近に感じることで、それらの理解が進んだのではないかと思います。

（高田恭一郎）



復元建物



ミュージアムエントランス



火起こし体験

中学生職場体験

例年にくらべ少し暑かった5月下旬、岡山市内の中学生が職場体験学習で古代吉備文化財センターを訪れてくれました。歴史好きの2人で、ともに将来の具体的な職業まではイメージできていなかったものの、発掘や文化財の仕事にたずさわってみたいということで、センターの仕事を3日間手伝ってもらいました。

初日はセンターの仕事を学習し、2日目は戦国時代の山城である南山城跡の発掘調査に参加しました。中学生は調査員の指示のもと、堆積した土の特徴を観察しながら慎重に土を掘り下げていきました。しばらくすると手が疲れてきて掘るのが大変だったようですが、土器を発見したときはとてもうれしかったようです。最終日は、これまでの成果を活かして、センターに校外学習で立ち寄ってくれた小学校の皆さんにセンターの仕事や展示品の解説をしてもらいました。言葉だけではなく、身振り手振りを交えた丁寧な説明に、一緒に立ち会っていた私も思わず聞き入ってしまいました。

3日間という短い期間でしたが、将来の職業選択の参考になってくれれば幸いです。
(金田善敬)



発掘体験：倉敷市南山城跡にて

こども体験教室・夏休み企画☆ワクワク古代体験！

5月18日(土曜日)にこども体験教室「土器をつくろう」を生涯学習センター人と科学の未来館サイピアで開催しました。参加者は18家族43名で、弥生時代や弥生土器の説明を聞いた後、実際にオープン陶土を用いて土器をつくりました。粘土を輪の形にして積み上げていく「輪積み法」という、弥生土器の作り方を参考に作るのですが、参加者の皆さんは集中した真剣な表情で製作に取り組んでいました。「実際に作るととても難しかったけれどまた挑戦してみたい。」「弥生人の技術の高さに驚いた!」という感想がありました。

夏休み企画☆ワクワク古代体験!は、7月23日(火曜日)から26日(金曜日)の4日間、生涯学習センター交流棟・人と科学の未来館サイピアにおいて開催しました。交流棟では、実物の土器に触れたり、弥生土器の立体パズルを組み立てる体験コーナーのほか、会場近隣の遺跡の出土品展示に加え、文化庁「記念物100年展」と日本遺産に関する展示を行いました。一方、サイピアでは例年大好評の古代体験メニューの「勾玉づくり」と「鏡づくり」を行いました。期間中に延べ662名の方が参加され、歴史を身近に感じる良い機会になったようです。(松尾佳子)



体験教室：熱心に土器づくり



古代体験：鏡づくりに熱中!

おかやまの遺跡を掘る vol.7

くたほりのうち
— 久田堀ノ内遺跡（鏡野町） —

◆ 文書にも残された守護家の争いと館跡

久田堀ノ内遺跡は、鎌倉時代から安土桃山時代にかけての遺跡で、苦田ダムの建設に先立って発掘調査を行いました。遺跡のあった場所には、ヤシキ・土居・馬場・堀・堀ノ内といった地名が残っていたことから、堀に囲まれた館の存在を想定していましたが、発掘調査の結果、館を囲う3条の堀のほかに掘立柱建物、墓、土坑などの遺構と土師器、備前焼、瀬戸・美濃焼、常滑焼、瓦質土器、陶磁器、刀、鎧の小札、和鏡などの遺物が数多く見つかりました。

3条の堀は、それらが同時に存在したのではなく、内側から外側へと順次拡張していったことが明らかで、堀によって囲まれた館も大きく3つの時期に分けて考えられます。内側の堀の時期は、14世紀中頃の鎌倉時代末～南北朝時代にあたり、館の大きさは南北が75m、東西が72mです。真ん中の堀の時期は、14世紀末から15世紀前半の室町時代にあたり、館の大きさは南北が95m、東西は80mです。外側の堀の時期は15世紀後半以降の戦国時代が中心で、館の大きさも南北が182m、東西は100mにも及び、堀の大きさも、内側の堀が幅3mに対し、幅7.5m余りへと拡大してます。これは、鎌倉時代から室町時代にかけての美作守護の館と考えられる院庄館跡の規模（東西200m、南北150m）にも匹敵する大きさです。

戦国時代に起こった伯耆国守護家の内紛について記した「山名政之注進状」文明13（1481）年によると、前守護山名元之は美作との国境の竹田郡（現在の鳥取県三朝温泉辺り）に立て籠っていたが、合戦に敗れて美作に落ち延びていった。それを、播磨守護赤松氏の家臣の大河原氏が引き取り、作州久多庄（現在の鏡野町久田）にかくまったとあります。久田堀ノ内遺跡こそ、山名元之がかくまわれた大河原氏の館の跡と考えられます。15世紀後半に館が最も大きくなったのは、この時の争いがきっかけではないでしょうか。

（弘田和司）



全景（南上空から）



3条の堀（東から）



編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142
<http://www.pref.okayama.jp/site/kodai/>
<https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai>

- ◎ 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
- ◎ 業務時間 AM8:30～PM5:15
- ◎ 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- ◎ 展示室の開館 AM9:00～PM5:00
年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。

ひろげよう あふれる笑顔と 思いやり